

昭和57年11月18日

内外情勢資料 国際特報

第616号

第3種郵便物認可(10)



時事通信社解説委員

田久保忠衛

中ソ国交正常化への胎動

Ⅱ日本も慎重な対応をⅡ

最近極めて不愉快なのは、日本のジャーナリズムに乱暴な用語を使用する例がめつきり増えたことだ。「軍国主義復活の恐れがある」と外国の指導者に言われても、「その場合の軍国主義はどのような内容を含みますか」と反問もできない最高指導者を持っていた日本であるから、雑ばくな議論が増えるのはいたし方ないにしても、「軍事大国」「軽武装」「重武装」などの用語がはらんするのは困ったことだ。中ソ間の動きを「和解」の一語で片付けている。一体「和解」とは「完全和解」を指すのか、「限定和解」を意味するのか、あるいは「国交正常化」なのか、「国交の一部正常化」なのかあいまいなまま、記事や解説が書かれている。情緒的な表現は国際問題の分析に害はあっても利はない。

増えてきた細かな兆候

中ソ関係を調べるにはまず事実関係を確かめてみる必要がある。今年に入ってからの中ソ間の目立った動きを列挙してみると、①二月十日から中ソ河川航行合同委員会第二十四回会議が中国の黒龍江省で開かれた②三月二十四日にブレジネフ・ソ連最高会議幹部会議長兼共産党書記長がウズベク共和国のタシケントで、中国に関係改善を呼び掛けた③三月二十六日に中国政府は外務省スポークスマン談話を発表し、ブレジネフ書記長のタシケント演説に「留意した」と述べた④四月十六日に中ソ国境貿易が二十年ぶりに再開された⑤五月十三日にカピツァ・ソ連外務省第一極東部長が北京で銭其琛外務次官、于洪亮外務省ソ連・東欧局長と会談した⑥五月二十日付ソ連共産党機関紙「プラウダ」にアレクサンドロフ論文が掲載され、中国は中ソ国境からのソ連軍の撤退などを前提条件とせずに交渉に応じるべきだと提案

その場合「○○カード」という表現は軍部全体に反発を抱かせるのではなからうか。チャイナ・カードとは、米国が中国を利用してソ連と対抗する戦略である。つまり、軍部としては「おれたちは米国の将棋のコマではない」と憤慨しないわけにはいくまい。中国首脳が○○カードに反対する発言を進んで行っているのは、軍部あるいは党内の批判派に向けられたものではなからうか。

東京外国語大学の中嶋嶺雄教授は、七九年十二月の三中総会以降ソ連に近い関係にあった彭徳懷グループの復活、劉少奇氏の名誉回復、周恩來氏の地盤低下などの現象を紹介し、中国にはソ連に接近する素地があるとの議論を展開しておられるが、軍部による反部の動きもそれに連動しているとすれば、いまの中国には鄧路線への大きなブレーキが存在するということになる。

中ソのお家の事情

中国と米国との関係が必ずしもうまく行っていない事実も、中国をしてソ連との関係改善の打診に向かわせた一つの大きな原因だと思ふ。九月十八日付の「内外情勢資料」で詳述しておいたが、レーガン政権下で台湾をめぐる米中のイザコザが続きすぎた観がある。台湾向け武器売却問題は去る八月十七日の米中共同コミュニケでひとまず片付いたと考えられるが、米国が「台湾に対する武器の売却を逐次減少させる用意があり、かつ一定の時間の経過後に解決を図ることを声明する」と約束しても、どのくらいのスピードで武器売却を減らすのかとか、「一定の時間」とはいつを意味するのかなどは一切不明のままだ。米中両国間には火種が残っている。

黄華外相は十月にニューヨークの外交関係評議会で演説をした。ここでの演説はすべてオフ・ザ・レコードで、外部に出ないことになっているのだが、どういふわけか新華社通信がこれを報道した。黄華外相は、米中間には台湾問題という障害が存在すると強調し、さらに米国は中国向けの高度技術、近代設備の輸出を制限するなど差別的措置をとっているのはけしからんと批判した。同外相は「米国は友人なのか敵なのか」とまで言っているから、中国の米国に対する不満はわれわれの想像をはるかに越えていると考えていいだろう。米中関係が悪化すれば、中国がソ連に目を向けるのは当然である。

ソ連は国内にいくつもの困難を抱えている。石油生産は頭打ちになろうとしてい